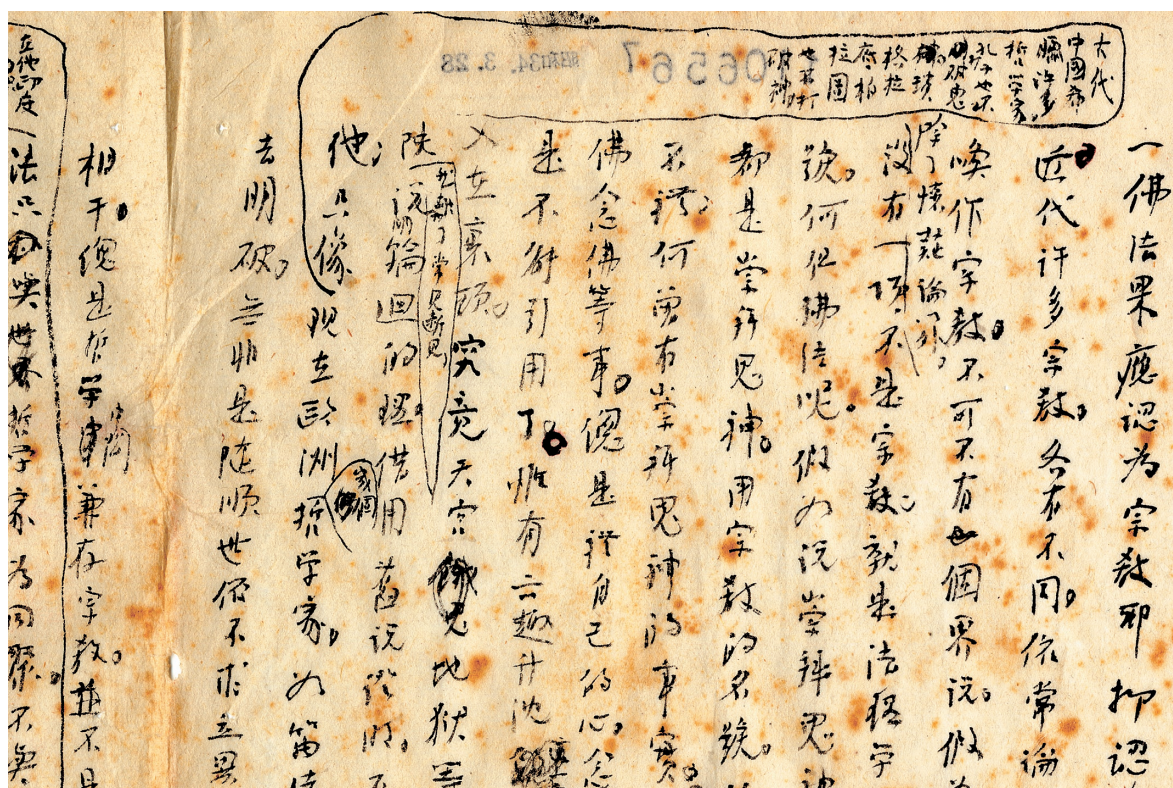


# 漢字と情報

No. 9  
2004・10



京都大学人文科学研究所 Documentation and Information Center for Chinese Studies (DICCS)  
 附属漢字情報研究センター Institute for Research in Humanities, Kyoto University



- 思いがけぬ再会
- 江戸・明・古代プロジェクト
- 中央研究院歴史語言研究所訪問記
- 人文研のアーカイブス(9)「章太炎『仏學手稿』」

## 思いがけぬ再会

井波陵一

『東洋学文献類目』の遡及入力に一応の見通しをつけた段階で、少し焦りすぎかも知れないが、センターとして次にどのような仕事ができるか考えてみた。『類目』の第1冊は1934年度版だが、人文研にはそれ以前の雑誌も少なからず所蔵されている。したがって、『類目』の延長線上に、さらに年代を遡って行くこともできるだろう。しかし、東洋学関係の学術論文をピックアップするだけでいいのだろうか、民国という時代そのものを対象とする必要はないのだろうか——そうした思いを抱いたのは、『梁啓超年譜長編』の翻訳に携わることで、必然的に民国期の雑誌を手に入る機会が多くなり、その結果として、当時の人々のじつに多彩な活動に驚嘆させられたからにほかならない。本格的な論説であろうが、短いコラムであろうが、数式や化学式が連続する論文であろうが、「豪傑訳」の詩であろうが、はたまた世界各地の写真であろうが、とにかくすべての記事が、未知のものを吸収し、新しい何かを生み出そうとする気迫にあふれていた。ひとたびそう感じてしまうと、すっかり黄ばんでみすぼらしくなった外見がかえって凄味を増して目に映るから不思議なものである。人文研所蔵民国雑誌記事のデータベース化——これだなど勝手に決めて、少しサンプルを作ってみることにした。

形式は全国漢籍データベースに倣うこととし、詳細検索の各機関の箇所を各雑誌に置き換えるとともに、雑誌ごとに年代順に縦覧できるようにする……などと、安岡さんに相談しなければ実現するかどうかも分からないことまで、とりあえず妄想だけはふくらませながら、作業にとりかかった。なるべく多くの雑誌に当たるため、件数の少ないものを優先的に選んだが、一つぐらい規模の大き

なものをやってみようということで、『清華週刊』にチャレンジした。王国維や梁啓超を扱って以来、無意識のうちに清華には何となく親しみを感じていたためだろうか。とすれば、すでに「なにもものに導かれていた」のかも知れない。

ドストエフスキーだ、ディケンズだ、トマス・ハーディだ、シュトルムだ、ゲーテだ、ロッセッティだ、よく分からない人だ……などと楽しみ半分に作業をしつつ、第10期第35巻135ページに至った時、思わずわが目を疑った。そこには、

不期底再見 (Unverhofftes Wiedersehen)

原著者 徳 J. P. Hebel 我訳

と記してあったのである(注)。ヘーベルの「思いがけぬ再会」ではないか。1931年2月20日、清華園で脱稿したという。慌てて前後の巻を調べてみたが、ヘーベルの他の作品の翻訳は載っていない。いったいどうしてただ一つ、この作品だけがポツンと翻訳されたのだろうか。訳者の経歴も、翻訳の動機や経緯もまったく分からないことも手伝って、考えれば考えるほど胸が高鳴った。なぜなら、これこそヴァルター・ベンヤミンの「物語作者」に引用され、彼の叙述とも相まって、じつに忘れがたい印象を残してくれた作品だったからである。

ベンヤミンの数ある文章のうちでも「物語作者」は屈指の名作だと思うが、彼はその第11節をこの作品のために充てている。「死は、物語作者

(注)『清華週刊』第35巻第10期特大号の目録は、以下の通りである。

清華發電廠問題之商榷	遠綸
星経四種跋尾	呉其昌
真空 (Vacuum)	呉正之講・周長寧記
水面蒸発之研究	張兆煙
波蘭解決土地問題之实例	風 訳
近世中国市政之蠹蝕 (續)	潘如澍
十九世紀末葉美国政治学及	
憲法中之政府与自由権	王肇徵
最近二十年之中国市政 (下)	潘如澍
流言	郁 朋
自殺	稽 安
不期底再見 (Unverhofftes Wiedersehen)	原著者徳 G. P. Hebel 我 訳
附録 十八年来週刊変遷表	周先庚・潘如澍合製



三国魏の『三体石経』。上から古文・篆書・隸書の順番で同じ文字が刻まれている。ここに掲げたのは、1935年に北平（北京）の人文科学研究所以から送られてきた写真版。寄贈に際し、橋川時雄が吉川幸次郎に宛てた書簡も現存している。

が報告しうるすべてを承認する。彼は、死からその権威を借り受けたのだ。言い換えるなら、そうした物語作者の語る物語が指し示す遡及先は、自然史なのである。このことは、かの比類なき物語作者ヨーハン・ペーター・ヘーベルが私たちに与えてくれた最も美しい物語のひとつに、模範的なかたちで実現されている。それは、『ラインの家の友の小さな宝箱』のなかにある「思いがけぬ再会」で……」（三宅晶子訳、ちくま学芸文庫『ベンヤミン・コレクション』2）という書き出しで始まるこの一節は、「自然史 (Naturgeschichte)」という、ベンヤミンの思想にとって非常に重要な（そして難解な）キー・ワードを理解するための手がかりを与えてくれる。しかもその解釈の質の如何は、ひとえに「思いがけぬ再会」をどう読むかにかかっているのだ。

その作品が、「物語作者」の生まれる五年前、まるで狙いすましたかのごとく、すでに中国語訳されていたことに驚きを禁じ得ない。わずか2ページあまりにすぎないが、その意義ははるかに深

く重いという気がする。もちろん、無知な自分が一人で騒いでいるだけなのかも知れないが……。中国のベンヤミン研究者たちはこのことをとうに知っているのだろうか（『民国時期総書目』によれば、中徳文化叢書15として14篇の中短篇小説を収めた楊丙辰訳『赫貝爾短篇小説集』が出版されたのは1941年である。ただ残念ながら、そこに「不期底再見」が含まれているかどうか、『書目』では確認できない。「学」とは楊氏のペンネームだろうか。ちなみに1939年には同叢書9としてシュトルムの小説集が出されている）。

いずれにせよ、あまりに直線的に説明されてきた中国近現代史の見直しが始まった昨今、民国期の人々が何を考え、何に興味を示したかをきちんととどってみるためにも、上記のデータベースはやはり必要なのではないかという思いをいっそう強くさせられた事件、まさしく「思いがけぬ再会」であった。（センター教授、センター主任）



## 江戸・明・古代プロジェクト

平勢隆郎

現在、わが東京大学東洋文化研究所5名と京都大学人文科学研究所・文学研究科4名の合計9名で、科学研究費補助金による研究プロジェクトを立ち上げている。基盤研究(A)に属する研究で、「我が国伝統中国学の独自性を発信するためのシステム開発」というのが正式な名称である。

発信する内容を検討しつつ、その内容をいかに効果的に発信するかを考え、現状可能な方法を模索している。

中国・日本・朝鮮・ベトナムは漢字文化圏としてくられることが多い。その漢字文化を代表するのが、儒教の経典である。しかし、漢字文化を語る上では、この儒教経典以外にも、検討すべき分野の書物がたくさんある。

われわれはそうした諸分野の書物を視野にいれながら、視覚的にうったえかける材料を提供し、ある問題を提起しようと考えた。

その問題というのは、古代の継承である。中国古代は、中国だけのものではない。日本のものでもあり、他の国家のものでもある。漢字は、都市国家で使われ、いわゆる中国の天下にひろまり、やがて漢族以外の国家にもひろがった。膨大な文献を逐一使うことなく、以上の経緯を端的に語ってくれる材料をどう選択し、どういう「形」にくりあげるか、それがわれわれの腕のみせどころとなった。

われわれの中国古代に関する常識は、江戸時代に作られたものが基礎になっている。同じことは、中国の清朝、朝鮮李朝、ベトナム阮朝についても言える。それらに大きな影響を与えたのが明朝である。

しかし、この明朝で作られた古代史認識は、近代以来明らかにされてきた古代史像とは、異なる部分が多い。とりわけ注目できるのは、春秋戦国

にいたるまでの王朝像である。その違いを明らかにし、それが明朝でいかなる変容をとげてしまったかを明らかにし、それに対して、江戸時代の学者たちがいかなる見解をもっていたかを明らかにし、それを他との関わりから検討する。

諸分野の書物を扱いながら、何が共通の財産として継承されたかを追い、何に独自性の発露を見いだそうとしたかを明らかにする。

この目的のために、ホームページを立ち上げた。(http://edo.ioc.u-tokyo.ac.jp/) われわれの科研プロジェクトの成果の一部として提供するものである。所期の目的を考え、標題を「江戸・明・古代プロジェクト」とした。東洋文化研究所の所内向けに立ち上げた後、少しずつ対外発信用にふりむけている。

内徹の一部を紹介しよう。我が国の江戸時代にあっては、『左伝』がことのほか盛んに研究されたという特徴がある。しかも、それを支えたのが、日本という国家ではなく、大小存在した藩である。藩が「お国」意識を発揮して学者を養成し、そうした学者が多くの『左伝』注釈を残している。そのうち、近代の『左伝』注釈に引用されたものが目でみてわかるような工夫をしてみた。そして同じ工夫を『史記』についてもすすめてみた。

機械的構成をのべれば、トロンとリナックスを組み合わせている。前者は、一枚一枚ページをめくるように内容を確認する「形」、後者は検索システム、それぞれに利用している。

江戸の学問、技芸の文化活動を、情報源の中国近世に逆照射して、それぞれの特徴と関係性を明示し、中国古代からの史的展開を動的に把握するためのデータベース構想である。インターネットの利便性を活用して、中国学研究の促進を図るとともに、江戸を糸口にして中国文化を広く知ってもらふ啓蒙的な役割が果たせればと思っている。

(東京大学東洋文化研究所教授)

## 中央研究院歴史語言研究所訪問記

佐野誠子

今年度より京都大学人文科学研究所と台湾の中央研究院歴史語言研究所（以下史語所と略）との人材派遣交流が始まった。これは相互に毎年二人の研究者を1ヶ月程度派遣し、学术交流を深めようというものである。初年度となる今年は人文研よりセンター助手の山崎岳（倭寇史）及び助手の筆者（志怪）が夏期休暇期間を利用し訪問を行った。史語所からは副研究員の陳昭容氏（金文学）が既に来訪を終え帰国の途に就き、十月半ばには副研究員の陳玉美氏（台湾考古学）が来日予定である。

これまで相互派遣協定がなくても互いに短期、長期での訪問及び資料の閲覧は行ってきた。しかし、今回は正式な客人ということで、現在の所長である王汎森氏や副所長の王明珂氏などと正式に面会し挨拶をした。また、山崎も筆者もそれぞれの専門に関係した史語所内の研究者や訪問学者と積極的に交流し、学术交流の名目にふさわしい訪問になったと思っている。筆者の場合本来の専攻は中国文学ではあるが、怪異の記録—志怪が専門であるため、史語所の研究者を中心メンバーとして進められている「鬼怪与文化」という研究プロジェクトの研究会を傍聴したり、また「鬼怪与文化」の研究参加者から台湾の怪異研究やその方法論について直接見解を伺えたことが非常に有益であった。

『漢字と情報』への寄稿なので、中央研究院における情報環境について簡単な紹介をしたい。

まずインターネット環境であるが、訪問学者であれば史語所内の電腦室でパソコンを利用することも可能であるが、日本からノートパソコンを持って行く方が格段に便利である。訪問学者に与えられる机にはパソコンに繋げるだけでなくインターネットに接続できる有線LANが引いてあり、

宿舍であった学術活動中心の部屋にも有線及び無線のネットワーク環境が整備されていた。

また中央研究院、そして史語所と言えば我々がよく利用させて貰っている漢籍全文資料庫が有名である。先述の「鬼怪与文化」の研究会に参加したときに、たまたま漢籍全文資料庫の仕事をする助理さん達が連れ立って傍聴に来ていた。その人数は正確には覚えていないが十名近くいたように記憶する。それが全員かどうかは分からないが、とにかく大勢のスタッフがいることは確かである。また書庫を見学した時にも拓本資料を整理するスタッフが働いている姿を見かけた。人材が質・量ともに充実しているからこそ、あれだけのデータベースを作れるのだと改めて思い知らされた次第である。

漢字情報研究センターも中国学研究者に誇れるデータベースを所有している。しかし、インターネット上で検索可能だという情報があまりにも海外には伝わっていないような気がしてならない。これまで個人的に何人もの海外からの来客の閲覧の世話をしてきたが、冊子体の漢籍目録や東洋学文献類目の存在は知っていても、インターネット上にあるCHINA3や全国漢籍目録データベースの存在を予め知っていたということはほとんどなかった。中国学論文の検索など、最新の論文を除けば、やはりCHINA3が一番便利だと思っているのだが、中央研究院の研究者が現在日本語論文を検索する時には主に中央研究院で権利を購入しているmagazine plusというオンラインの雑誌目次索引を利用するのが一般的であるようだ。実際には史語所の図書館である傅斯年図書館のリンク集にCHINA3などセンターのデータベースもリンクされているのだが、あまり存在に注意を払われていないようである。折角の宝の山も使われなければ意味がない。こちらがより努力してセンターのデータベースの存在を宣伝する必要があるかもしれないとの感想を懐いた。

（人文科学研究所助手）

## 人文研のアーカイブス (9) 章太炎『佛學手稿』

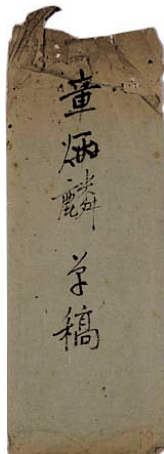
湯志鈞

### 1

章太炎の『佛學手稿』一冊は九紙からなる。別に灰色の封筒が一つ附いていて、古くなった紙の上に「章太炎學稿」と書いてある。原稿は白い宣紙の片面に書かれているが、その第一葉右下に「内藤」の二字があり、内藤湖南（内藤虎次郎、1866～1934年）の舊藏である。今は日本の京都大學人文科學研究所に歸している。

章太炎は「わか少くして異族をにくむも、未だ嘗て学を癡さず、早い時期に藏經を讀んだが、「よう提てんをりかい要鈞玄し、神旨に妙達」したのは三年の入獄の後、日本に渡ってからのことである。

1897年、章太炎は夏曾佑の影響を受けて、『法華』『華嚴』『涅槃』といった經を少しく涉獵したものの、「深く究めることが出来なかった」。宋恕が「どうして『三論』を讀まない



のか」と言ったので、讀んだけれども「あまり好きにはなれなかった<sup>1</sup>」。戊戌の政變の後、日本に流亡して、『瑜伽師地論』を買ったが、「煩雜のあまり全部を讀み終えることが出来ずじまい」であった。「蘇報案」が発生して、拘禁されること三年、友人が『瑜伽師地論』『成唯識論』を差し入れてくれたので、「朝晩研讀した結果、大乘の法義を悟った<sup>2</sup>」。1906年、出獄して日本に渡った、その頃の「東京留學生歡迎會演說辭」中に言う<sup>3</sup>。

佛教では一切衆生がみな平等なのだから、民族思想を持つてはならない、また逐滿復漢などと主張すべきではない、などというものがある。しかし、それは佛教は最も平等を重んじるが故に、平等を妨げるものを取り除く必要があるということを知らないのである。滿州政府は我々漢人に對し種々不公平な扱いをしているのだから、どうしてこれを驅逐しないでおれようか。……したがって佛教を提唱することは、社會道德の點から見て、最も重要なことである。我々革命軍の道德から見てもやはり最も重要である。諸君に望むらくは、ともに大願を發し、勇猛恐れることなきように願いたい。我々が懸命に勤めれば、必ず成就できるのだ。

かくして「宗教をもって信心を起こし、國民道德の増進」を主張したのである。『民報』に發表した論文にも佛教思想に染まった文章が少なくない。『佛學手稿』は章太炎が出獄ののち東渡し、『民報』を編集、東京で學を講じていた頃に書かれたものである。『佛學手稿』は四つの題目に分かっている。(一)「佛教はそもそも宗教であるか、それとも哲學であるか？」(二)「佛教にはなお圓滿を缺く部分があり、後世の人の補正を必要とす

1 『太炎先生自定年譜』「光緒二十三年丁酉，三十歳。」

2 同上「光緒三十年甲辰，三十七歳。」

3 『民報』第6號に見える。

る。」(三)「インド佛教と中國佛教とはもともと違いがあり、強いて同一視すべきではなく、互いに補うべき点がある。」(四)「佛教の務むべきことは、老莊と同じである。」これらどの部分にも、彼独自の主張が見られる。例えば「インド佛教と中國佛教とはもともと違いがある」という項では、以下のように説かれる。

およそインド人の思想は精密であって、大乘に通じているものなら、小乗に通じていないものはない。佛法を解するものなら、因明を知らないものはない。だから論證にも根據のあるものが多く、俗諦を離れて空しく眞諦を説くといった弊害がない。ところが中國は違う。思想は高邁だが、精細な研究をしないので、倫理に合わず、俗諦に通じない話で、いい加減に誤魔化してしまう人が多いのだ。これはインドの長所であって、中國の短所である。

また「佛教の務むべきことは、老莊と同じである」という項には、次のように言う。

老子に「常に善く人を救う、故に人を棄つること無し」と言うのは、善でない人も見棄てないということであり、善でない人を救って善である人にするということではない。本来善悪というものはなく、したがって見棄てることもないのだ。しかしこのはなしは近頃の無政府黨のはなしとはたいへん違う。老莊もはっきりと禮法を排斥し、政府を打倒しようとしたのではない。老子は明らかに「萬物の自然を輔けて而も敢えて爲さず」と言っているのではないか。また「聖人は常の心無し、百姓の心を以て心と爲す。善なる者は吾れこれを善とし、不善なる者も吾れ亦これを善とす」と言い、「信なる者は吾れこれを信とし、不信なる者も吾れ亦これを信とす」と言う。また「聖人の天下に在るは、歛歛きゅうきゅうとして天

下のためにその心を渾こん(ひとつ)にす。聖人は皆これを孩がいにす(赤子のように扱う)」ともある。言わんとすることは、適應せんとする情意じょういがあるばかりで、自己には善悪是非の偏見がないということである。だから老子のことばは、一方では天下を治めること、また一方では無政府ということになるが、それは當時の人の好みによるのであって、專政にせよ、立憲にせよ、無政府にせよ、不可なるはない。佛法における三乗のようなもので、機に應じた説法である。老子は政治上でも三乗と同じく、一定の方針にこだわってはいなかった。

すべて前人の未だ發せざる所で、當時の政治・思想状況に對して大いに効力を發揮したものである。

## 2

章太炎の『佛學手稿』が私に與えた影響はたいへん大きなものがあり、長年根本的には解決し得なかった問題、つまり章太炎は「白話文に反對であったか」という問題を解決してくれた。

章太炎の文章は古めかしく、詰屈聲牙であるため、多くの人が彼は白話文に反對で、白話文を書かなかったと考えている。彼の學生である錢玄同、魯迅ですら、章太炎は白話文を「排斥」したということを行っている<sup>4</sup>。章太炎が白話文に反對したのはすでに定説であるかの如くである。しかしながら坊間に『章太炎の白話文』なる書物があり、書名にも「白話文」をうたっている。これは曹聚仁の記録した『國學概論<sup>5</sup>』とはまた別のものである。なぜなら前者には明白に「章太炎の白話文」と題署してあり、後者のほうは章氏の演説集

4 錢玄同、魯迅の、章太炎が白話文に反對であったという見解については、錢玄同の「潘承弼に致す書」(拙編『章太炎年譜長編』第693頁)及び魯迅の「名人と名言」(『魯迅全集』第6卷第396頁)の記載を参照。

5 『國學概論』は章太炎の演説集で、曹聚仁編、泰東圖書館が1923年に出版した。

だからである。これはどう解釈すればよいのであろうか。蕭一山は「最後の一篇は錢玄同の作で、誤って収められたものである。實はこの書物は、章太炎と錢玄同とがやっていた『教育今語雜誌』から採録したものであって、この雑誌はほとんどみな錢玄同の手になるもので、「太炎」と署名してあるものも玄同の作品であるから、『錢玄同の白話文』と名付けて然るべきだ」という<sup>6</sup>。ここで『章太炎の白話文』の眞偽問題が関係してくるが、これは章太炎が白話文に反対したか否かに關わるので、まず先にはっきりさせておかねばならない。吳齊仁の編になる『章太炎の白話文』、1921年6月21日上海泰東圖書館による鉛活字排印本を調べると、確かに日本で発行された『教育今語雜誌』から採録したものである。例えば、その一「留學の目的と文法」は該雑誌の第四冊「社論」で、原名を「庚戌會演説集」といい、文末に編者庭堅による「この社論はもと中國各省から日本に留學している高等師範の學生が、獨角先生に演説をお願いしたものを記録した演説稿である」との「附識」がある。「獨角」とは章太炎の筆名である。二「中國文化の根源と近代學術の發達」は、該雑誌の第一冊の「社論」である。三「常識と教育」は、該雑誌の第二冊の「社論」であり、四「經の大意を論ず」は該雑誌の第二冊に掲載されている。五「教育の根本は中國の自心から發しなければならぬ」は、該雑誌第三冊の「社論」で、六「諸子の大概を論ず」も第三冊に載っている。七「中國文字略説」は、該雑誌の第四冊に「文字の通借を論ず」として見える。『教育今語雜誌』は東京で再組織された光復會の「通信機關」であって<sup>7</sup>、1910年3月10日（陰曆五月二十九日）に日本で創刊された。表紙には章太炎の手書で「共和紀元二千七百五十年正月二十九日發行」とある。裏表紙には「編集兼發行者：教育今語雜誌社、印刷者：秀光社」とあり、社の住所は「日本東京大塚町五十番地」となっている<sup>8</sup>。

章太炎が『教育今語雜誌』に発表した文章のうち、あるものは確かに講演記録である。例えば

「庚戌會講演録」は明らかに「講演録」となっているし、「附識」にも「獨角先生の演説を記録した演説稿である」と注記してある。しかし章太炎の白話文ではないと言えるであろうか、またこれを以て章太炎が白話文に反対した例證とすることが出来るであろうか。それは出来ない。なぜなら第一に、『教育今語雜誌』は光復會が再編された後の「通信機關」であって、當時、章は光復會の正會長であり、再編後の光復會は「教育を以て進取となし、學生の志あるものを察してこれに聯絡」するもので、また「太炎公を將て改めて教育會會長となさ」としていたのである<sup>9</sup>。『教育今語雜誌』は東京で刊行されており、章太炎もこの時東京に居たのであるから、正會長の文章をその「通信機關」雑誌に登載するには、少なくとも章太炎の同意を得なければならないはずである。發表時に「太炎」にせよ「獨角」にせよ自身の筆名を用いるのは、自分の文章あるいは講演録だということを承認したものであるに違いない。第二に、章太炎の講演の記録は、これ以外にも多數あ

6 蕭一山『清代學者著述表』、商務印書館、1944年9月、贛版。

7 魏蘭『陶煥卿先生行述』、油印本。

8 この雑誌には巻頭に「刊行教育今語雜誌之緣起」を載せて言う。「環球の諸邦、興滅常なし。その能く數千載に屹立して永く存せるものは、必ず特異の學術あり、以てその種性を發揚し、その民徳を擁護するに足るもの有り。中國では近年「外禍日に急にして、八比（八股）替を告げ、兼ねて歐學の東漸すれば、濟濟たる多士の悉く國故を捨て、新しきには是れ趨き、一時の風尚の及ぶところ、國文を斥棄け、國史を芟夷かんとし、軒輊、歴山の黄人にして、今すでに夷に變ずるを得ざるを恨むに至る。」「同人のこれを憂えるあり、爰に一報を設け、顔けて『教育今語雜誌』という。」また章程第一章「宗旨」には「本雑誌は國故を保存し、學藝を振興し、平民に提唱して教育を普及せんことを以て宗旨となす」と言い、第二章「定名」には「本雑誌は上列の宗旨に依り、演べるに淺顯き語言を以てすれば、故に『教育今語雜誌』と名づく」と言う。第三章「門類」では内容を「社論」「中國文字學」「群經學」「諸子學」「中國歴史學」「中國地理學」「中國教育學」「附録」の八類に分ち、月に一冊を出した。上述の「緣起」「章程」は章太炎の門人錢玄同が書いたものらしい。

9 陶成章「石君に致すの書」手迹、1910年、湖南社會科學院藏。



る。例えば有名な「東京留學生演説會演説辭」は『太炎文録』には収められていないものの、彼の生前すでにずっと人に引用されていたが、章太炎はそれに對して何ら異論を唱えていない。当初、この一文が『民報』に發表されたとき、章太炎はさらに「告白」を載せて、「香港の各報館及び廈門の同志の賀電に接し、感愧無量なり。ただ矢て信に矢て忠に、力を竭し死を效て、以て諸君の望を塞んことを、特にここに鳴謝す」と述べていて、次の號の『民報』を編集した時にも、彼の演説であることを否定していない。第三には、1920年、『太炎教育談』が四川で出版された。「庚申仲春刊于觀鑒廬」とあり、共二卷、二冊に分ち、すべて『教育今語雜誌』に載った講演である。卷一は三篇からなり、一「文字の歴史哲理の大概を論ず」は『教育今語雜誌』第一冊の「社論」「中國文化の根源と近代學術の發達」であり、二「文字の通借」はもと『教育今語雜誌』第四冊に載せられたもの、三「常識を論ず」はすなわち『教育今語雜誌』第二冊の「常識と教育」である。卷二も三篇で、一「群經の大意を論ず」は『教育今語雜誌』第三期の「經の大意を論ず」、二「諸子の大概を論ず」はもと『教育今語雜誌』第三期に載せられ、三「教育の根本は中國の自心から發しなければならぬ」はもと『教育今語雜誌』第三冊に載った。これら『教育今語雜誌』から各文を集めて一書としたものが『太炎教育談』であって、章氏の名前を署してある。また1921年には四川で『太炎學說』上下二卷が刊行され、「辛酉春觀鑒廬印」としてある。上卷は章太炎の演説記録であり、中には過去の演説を拾い集めたものもあるが、ほかには1918年に章太炎が四川で行った演説の記録である。これらの講演記録も白話を使っている。これら二書は章氏の蘇州の寓居になお残されているので、章太炎がそれを見たということが分かるが、彼はこれらの書が彼の「教育談」「學說」であることを否定していないのである。第四に、『章太炎の白話文』の編者は実際には張靜廬である。1963年に張靜廬が私を訪問したとき、そ

のことを尋ねてみた。張が言うには、「『章太炎の白話文』は自分が章太炎の上海の寓居で貰い受けて刊行したものだ。當時二百元の原稿料を支拂ったら、太炎先生はたいへん喜ばれた。編者を「吳濟仁」(Wú Jírén)としてあるが、これは「無其人」(Wú Qírén)ということだ」というのである。章太炎が自分でこれらの「白話文」を張靜廬に渡したとすれば、『章太炎の白話文』という書名は當然と言わねばならない。この書物の「編集短言」中にはまた「章先生の生涯で自ら書かれた白話文は非常に数少ない。編者はずいぶん苦勞をして、ようやくこれら數篇を集めた」と言っている。『教育今語雜誌』に刊行された「白話文」がすべて「親筆」であるかどうか、或いは講演記録であるかは、なお研究の餘地があるが、それが章太炎から直接張靜廬に手渡されたものであるからには、少なくともこれらが自分の作品であると認めていたのである<sup>10</sup>。

『章太炎の白話文』は、章太炎が會長であった光復會の「通信機關」たる『教育今語雜誌』から再録されたものだが、その内容を見ると大部分が講演記録であって、『庚戌會演説録』には「演説を記録した原稿である」と明瞭に注記してある。その他の文章も他人が「記録したもの」である可能性がある。要するに演説稿であり、「記録したもの」であるから、章太炎が白話文を書いた、或いは白話文に賛成であったことの明らかな説明にはならないと思われる。

私は、章太炎はその初期、すなわち革命を提唱していた時期には、白話文に賛成していたのだと考えている。そういう言論があったばかりではなく、自身でも白話文を書いたのである。

1905年から禺山世次郎(黃世仲、字は小配)がその『洪秀全演義』を『有所謂報』と『少年報』に連載しはじめ、翌年香港で六十四回からなる完本が刊行された。そこに以下の章氏の序文が載っ

10 私はかつて蘇州の章氏寓居で『章太炎の白話文』を見たが、これは書物が出版された後、章氏に目を通して貰うべく送り届けられたことを意味する。

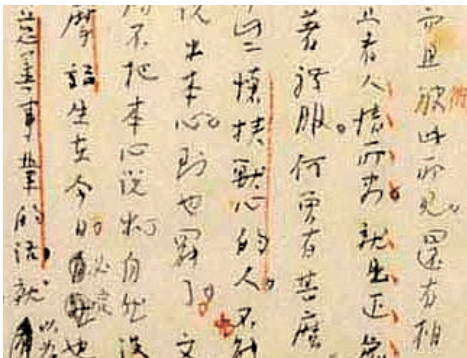
ている。

事を演べるのは小説家の能事<sup>とくいわざ</sup>であって、舊史にもとづき、その會通を觀、その眞偽を察し、己の意を推して以て古人の用心<sup>こころばえ</sup>を明らかにするのである。而してこれを附するに街頭の巷談を以てすれば、また田家の婦子をして秦漢より今に至るまでの帝王師相の業を知らしめることができる。さなくば中華人民の齊しく國故を知らざること、將に印度と同列となるであろう。されば事を演べる者には皮傳<sup>こじつげ</sup>が多いとはいえ、存古の功はまた大きいものがある。

彼はまた次のようにも言う。

近時はじめて故事を搜集し、太平天國の戰史<sup>つく</sup>を爲るものあり、その文辭駿驟にして、以て潛徳の幽光を發するに足るべし。然れども里巷<sup>まち</sup>の小人<sup>チンピラ</sup>の識るところに非ず。そもそも國家種族の事は、聞く者愈々多ければ、すなわち興起するもの愈々多いのである<sup>11</sup>。

彼は、演義というものが「田家の婦子をして秦漢より今に至るまでの帝王師相の業を知らしめ、又「里巷の小人の識るところ」たらしめ、どの家でも知らぬもののないほどに「明らかに説き聞かせ」るものであると考える。彼は「文もまた俗に適う」ことに賛成している。



1906年6月、章太炎は日本に渡り、『民報』の主編に任じた。10月、『復報』第5期に「西狩」の名前で「逐満歌」を發表したが、そこに次のように言う。

憐れなるかな我が漢家の人！羊豚ばらに屠場へ送らる。揚州の圍みは十日に及び、嘉定・廣州みな屠られぬ。福建にては康親王、良家の淫掠さながら宿娼。駐留軍の韃子<sup>やつら</sup>はひときわ無頼、畑仕事は考慮の外。手當たり次第の食い放題、良き糧米はみな取り上げる。漢人が満人にたてつけば、斬首徒刑は好き勝手。満人が漢人を苛めば、三人殺してやっとお裁き。……今後は税をかけぬとは口先ばかり、數限りないピンハネ銀。今後は徴發いたしません、言つた尻から各種の勞役。試験<sup>インテリ</sup>によって讀書人を騙し、富民も騙され官を捐う。なるなら官員と人は言い、もはや仇讐<sup>かたき</sup>を忘れ果て。地獄に沈んだ二百年、ついに天王洪秀全。満人熱河に逃るれば、來るは漢奸曾國藩。洪家は失敗、漢家は滅び、猿の皇帝<sup>かたき</sup>あいも變わらず。いざ兄弟に物申さん、死讐<sup>かたき</sup>を心にうえつけよ。……ゆめ聞くなかれ康・梁輩のたわごとを、第一<sup>まず</sup>のかたきは眼前にあり、光緒皇帝名は載<sup>ツァイティエン</sup>。

その思想内容はいま論じないとして、文字形式から言えば、これは非常に「通俗的」な歌謠であって、「文言」とは言えない。

「逐満歌」は章太炎が偶々作ったものであって、通俗的歌謠とは言えても「白話文」とは言えないという人があるかも知れない。またこれは『復報』に掲載されたもので、その墨跡は発見されていない。京都大學所藏の『佛學手稿』は、非常にはっきりと見て分かるが、章太炎の眞筆であり、句讀點まで付いている。上に引用した『佛學手

11 章太炎「洪秀全演義序」。拙編『章太炎政論選集』の307～308頁に見える。

稿』には、「的」「了」など文言では用いない虚辭が使われ、本文の内容も完全な白話である。章太炎が「白話文に反対であった」などと言えるだろうか。反対しなかっただけでなく、自分でも若い時期に「白話」を書いていたのである。

章太炎は晩年、当時の白話文に對して意見があり、「排斥」したことも確かにあった。しかし彼の「排斥」は完全な抹殺ということではなかったし、又「排斥」するいわれもあったのである。章太炎はその初期、革命の宣傳のため、「俗に適う」ため、自身も白話文を書いた。晩年、彼は當時の白話文に對し批判的であったが、一方むかし『教育今語雜誌』に載せた文章をあつめて『章太炎の白話文』を出版している。だから章太炎がその晩年に白話文に不満であったからと言って、簡単に彼が「白話文に反対であった」と言うわけにはいかず、彼が初期に白話文を書いたという事実を忘れるわけにはいかない。また彼が白話文を「排斥」したからと言って、その「排斥」の原因を考えないわけにはいかない。

『佛學手稿』の發見によって、我々は章太炎と白話文の關係について更なる認識を持つことが出来る。

### 3

私が『佛學手稿』を見るのが出来たのについては、島田虔次教授に感謝せねばならない。私が島田教授の名を知ったのは古いことだが、お会いしたのはかなり後になってからである。1981年の6月1日、島田夫妻が上海に來られた。四日という短い期間であったが、何度か語り合う機会があった。京都大學人文科學研究所に章太炎の『佛學手稿』を所藏しているので、コピーを作って差し上げようというお話であった<sup>12</sup>。しばらくして狭間直樹教授からコピーが上海に送られてきた<sup>13</sup>。1984年3月、私が京都大學を訪問したときには、オリジナルを見るのが出来た。歸國後、更に研究を加えて「章太炎と白話文」を書いた<sup>14</sup>。島田教授が親切にも私に『佛學手稿』を提供して下さ

ったのには、私に『章太炎年譜長編』や『章太炎政論選集』などの編著のあることを知っておられたからだけでなく、教授みずからが章太炎の研究に従事され、章太炎の佛學思想に對する優れた研究をしておられたからでもある。教授の「章炳麟について・中國傳統學術と革命」第二章には以下のように見える<sup>15</sup>。

彼は獄中では佛敎論理學の書『因明入正理論』、唯識の書『成唯識論』『瑜伽師地論』の類を讀破したのであって、それがやがてその學問と思想とに大きな影響を及ぼすことになるのである。

章太炎が獄中で佛學の書籍を讀破したこと、また東渡後の著作に佛敎の影響が見られることなど、島田教授の指摘は、まことに要領を得たもので、核心を衝いている。

京都大學人文科學研究所では『佛學手稿』の影印を準備されていると聞かすが、たいへん意義深いことである。章太炎先生の佛學に關する議論が世に公開されるばかりでなく、その個性溢れる墨跡を目の當りにすることが出来る。同時に中國哲學を深く研究された島田教授を追悼する意味もある。今秋、天津において、狭間直樹教授がその知らせをもたらされ、併せて私に序を求められた。私としては當然ながら書かねばならない。上海に歸ってから、雜務を排して、この一文を書き上げた次第である。(上海社會科學院歷史研究所研究員)

2003年10月30日(高田時雄 譯)

12 [譯者補] 筆者による島田虔次教授追悼文としては、「章太炎『佛學手稿』のことなど」(京都での講學)(岩井茂樹譯、『東方』254、255號)がある。

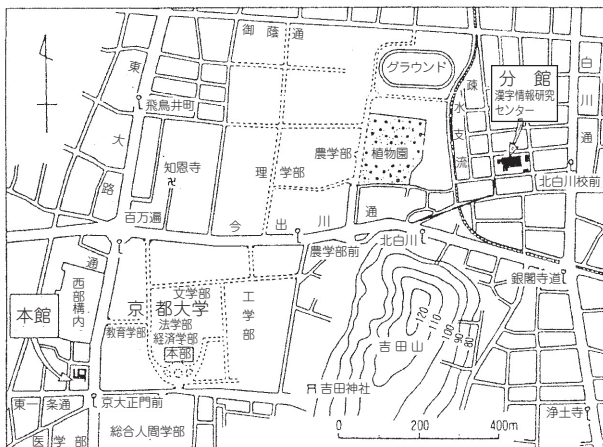
13 この箇所、狭間教授によれば、湯氏の記憶違いとのこと。研究所が作成したカラー寫眞は郵送しにくいものだったので、森時彦教授が上海を訪問した時に持参し手交されたのである。

14 [譯者補] 「章太炎與白話文」『近代史研究』1990年第2期(總第56期)112-119、199頁。

15 中國語譯は張賢譯「章太炎的事業及其與魯迅的關係」『章太炎生平與思想研究文選』191頁、浙江人民出版社、1986年8月版。[譯者補] この箇所、島田氏の日本語原文を用いた。『中國革命の先驅者たち』筑摩書房、1965年、185頁。

## HP・TOPICS

今回は、小南一郎教授のHP紹介です。トップページでは、かわいい招き猫が出迎えてくれます。コンテンツは、トトログループ？に分けられています。先生の御論考の最新版が入手したければ、「狛兎第二穴」(うさぎさんの二番目のかくれが)から「狛兎第三穴」(うさぎさん ついの住みか)へと進入すれば、お宝がゲットできます。先生ならではの小話！も面白いですよ。



## 【DICCS NEWS】

・全国文献・情報センターワーキング・グループの会合を6月11日(金)午後2時より本センター会議室にて開催した。本年度のセンター長会議の議題、5センター共催セミナー等について議論した。セミナーに関しては、各センターでそれぞれ行う方式に変更することを決定した。

・全国文献・情報センター人文社会科学学術情報セミナーの日程及びテーマは、以下の通りである。詳細は、本センターHPを参照のこと ([http://www.kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/courses/2004/5c-2004.html.ja.shift\\_jis](http://www.kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/courses/2004/5c-2004.html.ja.shift_jis))。

2004年9月22日(水) 13:30~16:10

「アジアバロメーター・シンポジウム」

2004年11月26日(金) 10:30~12:30

「外国法の調べ方 イスラーム法・ロシア法」

2004年12月4日(土) 13:30~

「兼松資料セミナー」

2005年3月25日(金)

「東洋学へのコンピュータ利用」

・2004年度の漢籍担当職員講習会は、10月4日(月)~10月8日(金)に初級を実施し、19名の修了者があった。中級は11月8日(月)~11月12日(金)で、18名の参加を予定している。

・「第一回 TOKYO 漢籍 SEMINAR」を、文部科学省の後援で開催することになった。なお、本セミナーの総合テーマは「古いけれど古びない、歴史があるから新しい」である。

テーマ 「漢籍はおもしろい」

日時 2005年3月12日(土) 10:30~16:00

会場 学術総合センター2F 中会議場

(東京都千代田区一ツ橋2-1-2)

内容 「書写の文化史」 富谷至教授

「漢訳仏典の成立」 船山徹助教授

「使えない字—諱と漢籍」 井波陵一教授

発行日 2004年10月15日

発行所 京都大学人文科学研究所附属  
漢字情報研究センター

〒606-8265 京都市左京区北白川東小倉町47

電話 075-753-6997 FAX 075-753-6999

<http://www.kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/>